ふりふりドワフ☆

はのん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ふりふりドワフ☆

【Ｎコード】
Ｎ３１４６Ｙ

【作者名】
はのん

【あらすじ】
高校生の主人公は小さな人間、小人を発見した。
それは手のひらサイズで、どんな隙間も彼らの秘密基地。
可愛い見かけによらず、彼らは一端の戦士だという・・

おはなしのはじまり。

私、六車七未（むぐるま ななみ）はただ今下校中。
家に着いて紅茶を飲もうとしたら、カップの中に不思議なものを見つけた。
それは世にも珍しい小人だった！
この小人、すごく個性的でわがままで、だけど可愛い。

『あんた、今日から私の”保護者”になってね』

「私があなたの保護者？」

私はこの小人の言うがままに”保護者”に任命された。
最初は戸惑ったけど可愛いしからまあいっかぁ。
なんてお気楽なこと考えていたらまた新しい小人を発見。
またまた保護者に任命されてしまった。
そして、おはなしははじまる。

ほごしゃになってね。

事の始まりはほんの１５分前だった。

「ただいまー！・・・あれ、返事がない。ママいないのかな」

専業主婦の私のママは、私が学校から帰ると大抵家にいる。
けど、今日は珍しくどこかへ出かけているみたい。
私は部屋に荷物を置いてリビングへと向かう。
するとテーブルの上に置き手紙を見つけた。

「んーなになに？七未へ。ママ、ご近所さんと近くでお茶してます。夕ご飯には間に合わすから留守番よろしくね。ママより。ＰＳ．何かあったらケータイに連絡を・・・って、だったらこの手紙の内容もケータイでメールすれば良かったのに。ママったら」

いつもどこか抜けているママ。そのママの手紙に苦笑いしながら、私は紅茶のカップを手に取った。

「昨日はストレートにしたから、今日はミルクにしようかな・・・ん？」

ふとカップに目をやると中に何かが入っている。

「きゃー！」

私は勝手にネズミとかゴキ●リだと勘違いして、カップを放り投げた。
するとカップは綺麗に弧を描いて飲み口の方から着地。

運良く割れなかったが、まださっきの何かはこの中にいる。

「・・・」

私は恐る恐るコップに近づく。

「そーっとそーっと・・・」

もう少しで手が届きそう。

「もうちょっと・・」

指先がカップに触れたその瞬間。

ガタッ！

「きゃー！」

今まで詰めた間合いを、私はひとっ飛びで戻った。

すると今度はどこからか声が聞こえる。

『いったーい！いきなり投げ飛ばすなんてひどいですー』

「何！？誰！？」

『ここですー。ここー！』

声の主はひっくり返ったカップから出てきたのだった。

「あなた・・・何？もしかして・・・・・・小さいおじさん？」

『断じて違います』

「そうね」

『レディーに向かっておじさんとはひどいですー！』

「ごめんね。それで、あなたは一体？人間にしちゃ随分小さいよね」

『私はドワフのウメです』

「ウメちゃん？・・・良いお名前ね」

『今の溜めはなんですか！？あなた先ほどから失礼です！』

「いやいや、本当に古風で良い名前だよ。私は六車七未」

『六車七未様、心得ました』

「それにしても、ウメちゃん。ドワフって何？」

『ドワフとは私達小人のことを指しています』

「小人って、そのまんまの意味なのね。あ、達って事は仲間がいるって事？」

『はい。でもその説明の前にあなたにお願いがあります』

「お願い？いいよ、どんな事なの？」

するとウメちゃんはおもむろに小指を差し出した。

『あなたの小指も出してください』

「ん？こう？」

私とウメちゃんの小指が触れあうと・・・

『あんた、今日から私の保護者になってね』

「了解！・・・え？」

『ありがとうございます。契約完了です。今日からよろしくお願いしますね、七未さん』

「何！？今何が起こったの？さっきウメちゃんのとは違う声が聞こえたし、口が勝手に”了解！”なんて言っちゃうし。なんか今、私理不尽な契約しなかった？」

『ふふ。契約内容の説明は後ほど仲間の説明と一緒にしますね』

「は、はあ」

そして私はとんでもない事をしたことに気づくのだった。

くにをすくってね。

私一体何をしたんだろう？
心に一抹の不安がよぎる。
でも、ウメちゃんの説明ちゃんと聞いたら大丈夫かもしれない。
そう考え直した私はウメちゃんを自分の部屋へと運び、深呼吸を一つついた。

「ウメちゃん、さあドンと説明しちゃって」

『はい。ですがその前に、私達ドワフについてのお話をしてもよろしいですか？』

「どうぞ。聞かせて」

『ありがとうございます。それでは初めにドワフの国のお話から。私達ドワフの国は始めは一つの王国でした。そしてこの国は初代の王様から代々ご子息様が王の位を受け継いでこられました。ですがある代の王様のご子息様が双子でお生まれになったのです。王様はどちらを次の王にするかを悩まれました。そして王様は、双子の間で王の座をめぐって争いが起こることの無いようにあることをご決断なさいました。それは、ドワフの国を二つに分ける、というものでした。ドワフの世界にも、人間の黒人や白人などのように人種があり、メイ種とバク種というのがあるんです。そこで出来たのがメイ種の住む”ラザニア国”とバク種の住む”チャウダー国”です。国を二つに分け、王を二人とするこのやり方に不満を述べた者はなく昨今までは平和な暮らしを送ることが出来ていました』

「出来てました・・・ってことは、今は違うってことなの？」

『はい・・。双子の王が亡くなられた後も、今まで通り王様のご子息が位に就いてこられました。しかし、半年ほど前にラザニアのヨーフー王とチャウダーのワーフー王が、ご子息を残されることなくお亡くなりになったのです。それからというもの、国は一つに戻り、ヨーフー王の奥方様であるロザリオ様が王の位に就かれたのです。ワーフー王の奥方様はすでに亡くなられており、ロザリオ様は才色兼備な方で、大衆からの支持がとてもありましたので、王の座に就かれたのです』

「へえー・・・小人の世界もなかなかしっかりしてるんだね。それで、国は今どうなっているの？」

『国が二つに分かれていた歴史はとても長く、両国にはそれぞれ、違う風習や生活が生まれました。そして、一つに戻った今、二つの人種は対立し合うようになり、争いが多々起こるようになったり、ロザリオ様で王家の血筋が途切れるのを狙って、反乱を起こす者が出始めてきました。その争いごとを起こす者の中に人間と手を組み更なる力を得ようと、人間界に進出する者がいたのです。それを知ったロザリオ様は、国を乱す者達を抑さえるための組織を創設されたのです。その組織には、反乱に加勢しない者、愛国心のある者など、悪意のないドワフだけを選抜したのです。組織といえど、これはあくまでも内密に創られたものなので、私にも組織の大きさがどれくらいで他にどんなドワフがいるのかは把握できていません』

「その内密に創られた組織の存在を知っているということは、ウメちゃんもその選抜された一人なのね？」

『そうです。先ほど人間と手を組む者がいると言いましたが、私達ドワフは人間の力を借りることによって特殊な武器が使えたり、攻

撃することが可能なのです。ですのでロザリオ様は目には目をということで、私達も人間と手を組んで国を乱す者達と対抗しようとなさったのです』

「へえー。それでウメちゃんは人間界に来たのね」

『はい、そうなんです』

「でも何でカップの中にいたの？」

『私にもそれは分かりません。ドワフの世界からロザリオ様のお力を使って人間界へ来ることが出来るのですが、その行き着く場所は不特定なんです』

「それでウチのカップの中にね。さっきは放り投げちゃってごめんね」

『本当にあれはびっくりしました。けど、契約を交わしてくれたのでもう良いです』

「あー！それそれ！契約ってどういう事なの？」

『先ほどお話ししたとおり、人間と手を組むと特殊な力を得ることが出来るのです。けれどそれには人間と契約を結び、”保護者”になってもらわなくてはいけないんです』

「それじゃ保護者になった人間は何をすればいいの？」

『主に私達に武器を造っていただきます』

「武器！？あたし、そんな物つくれないわよ」

『大丈夫です。契約を結んだ人間なら誰でも出来ますから』

「ふーん・・・。っていうか、契約って普通内容を知ってから了承を得てから結ぶものじゃないの？」

『ええ、私もそう思うんですけど、ロザリオ様が・・その・・お強い方でして』

「強い？」

『えーっと、行動的というか、まあ、はっきり言いますと強引！・・・と言う感じの方で』

「え、ロザリオ様って才色兼備で大衆に人気があるって言わなかった？」

『ええ。人前に出れば・・ですけど。まあ、実際お綺麗で頭の良い方ですけど、少々荒っぽい面もあって、ドワフの国のピンチにおいて手段を選んでいる暇はないと仰り、ロザリオ様のお力で人間界に降りたドワフは出会った人間とすぐに契約を結べるようにされていたんです』

「すぐに結べるようになっていたって・・・そう言えばあの時、勝手に口が了解！って・・！」

『それがロザリオ様のお力なのです』

そう言ってウメちゃんは何かを取り出した。

「これ何？」

『高機能録音機です』

「？？」

『この録音機にロザリオ様の声を録音し、契約時にあなたに聞かせたのです』

「もしかして、”あんた、今日から私の保護者になってね”っていうあの声はロザリオ様って方の声？」

『はい、その声であなたに術がかかり、問答無用であなたが了承するようになっていたのです』

「・・・・。超強引」

『申し訳ありません。普通は契約の儀式として互いの小指に触れてドワフが契約内容を言い、人間が了解と言えば契約完了なんです』

「あたしも普通が良かった・・・で、この契約内容は？」

『それは、ドワフの国の争いを無くすため、私達と共に戦っていただくという内容です』

「はあ。でも、ロザリオ様にそんな力があるなら、その力を使って争いを押さえることが出来るんじゃないの？」

『いえ、ロザリオ様のお力はドワフにはほぼ無効なのです』

「どうして？」

『ロザリオ様に限らず、ドワフは皆、そういう体になっているのです。私も詳しいことは分かりませんが、ドワフ同士が力で互いを傷つけ合わないように、遙か昔からドワフ同士の攻撃は効かないような体になっているのです。ですが、そこに人間の力が加わるとその仕組みは壊され、互いに攻撃をし合うことが出来るようになってしまうんです』

「なるほどね。でも、争いからは争いしか生まれない。あたしがあなた達に手を貸して、国を乱そうとしているドワフと戦っても意味がないんじゃない？」

『そんなことはありません。ロザリオ様の使いで人間界に来た私と契約をしたあなたは、これから現れる敵に勝利したとき、相手の体にロザリオ様の紋章を刻むことが出来ます。紋章を刻まれたドワフは人間の力を借りても、攻撃の効果を失うようになるんです』

「それは便利ね。人間の世界にもそんな紋章があれば良いのに・・・それで、あたしに何かメリットはあるの？」

『いいえ』

「は？」

『ボランティア。です』

「・・ぼらんてぃあ？」

『はい、ボランティア』

「・・・普通の契約の場合はどうなのよ」

『普通は、契約の前に人間と交換条件を交わします。それから儀式を・・』

「つまり、あたしはそれを省かれたのね・・とほほ」

『そんなに肩を落とされないでください。雑用ぐらいでしたら何でもしますから』

「そう？ありがとう。それで、あたしはこれから何をすればいいの？」

『まずは仲間を探しに行きましょう！』

「仲間？ああ、ウメちゃん以外の組織のドワフね」

『はい。実は、組織の中で一番最初にドワフと契約した人間が他のメンバーの保護者にもなるんです』

「はい？ってことは、あたしが何人いるか分からないドワフ組織の保護者になれってこと？はあ・・次から次へと・・あーもう！最初から全部話してよー」

『ごめんなさい。どうやら、私が一番最初に人間と契約をしたみたいですね』

「まあ、契約しちゃったんだからしょうがないか・・こうなったらやるっきゃないかー！」

『七未様！ありがとうございます。ロザリオ様の為に、ドワフの国のために、悪の体にどんっどん紋章を刻んじゃいましょー！！』

「う、ウメちゃん。あーた意外と過激な事言うのね・・」

そして私のファンタスティックな人生が始まった。

なかまをみつけてね。

契約というものを交わしたせいで、私はウメちゃんの保護者になった。
というか、組織全体の保護者になることが運命づけられているらしい。
この先、何が起こるか分からないけど、こうなったからには割り切って行こうと私は決めた。
そんなこんなで私とウメちゃんは仲間を捜しに出かけることになった。

「探すっていても、どこを探せば良いんだろう？ドワフってみんなウメちゃんみたいに小さいんでしょ？」

『とりあえず、町を歩いてみましょう。何か手がかりがあるかもしれないです』

「そうだね、まずは行動あるのみ！行くよウメちゃん！」

『はい！・・・すっかりやる気になってくれて良かった・・』

「ん？何か言った？」

『いえ！行きましょう』

そして町中を歩き回った私達だったが、ドワフを一人も見つけられずにいた。

「ねえ、ドワフって狭いところが好きだったりとかしないの？」

『いえ、そういうことは無いと思います。あの、七未さん私達ドワフのことを小動物か何かと思ってません？』

「いや、まあ、小さいからね。人間がただ小さくなっただけって分かってるけど、やっぱり、ハムスターとかと同じ部類になっちゃうよねー」

『なっちゃうよねーって、やっぱり七未さんちょっと失礼です！』

「ごめんごめん。だって今まで小人なんて見たこと無かったし、実際に見るとハムスター並に小さいんだもん」

『違いますから！』

「わかってるわかってる。はい、どーぞ」

『ひ、ひまわりの種なんて食べません！！』

「あはは・・・あ、そうだ一つ気になることがあるんだけど」

『なんですか？』

「ウメちゃんの組織にいるドワフはロザリオ様の力で人間界に来てるんでしょ？じゃあ、他のドワフはどうやって来てるのかなって思ったんだけど」

『ええ、それなんですけど、ちょっと深刻な問題なんです』

「深刻？まさか、またあたしが何かやらなくちゃいけないことがあったりするの？」

『いえ、この話は違います』

「よかったー。それで深刻な問題って？」

『ドワフの国は本来王の力で結界が張られてあって、人間界に行くことは出来ないのです。もちろん外の者が国の中に入ってくることも出来ません。ロザリオ様も同じく国に結界を張ってらっしゃいましたが、国が荒れていくのに比例して、結界に穴が出来るようになってしまいました。きっとロザリオ様は乱れる国を治める為にも力を相当使っておられるので、その疲れが出てきたのだと思います』

「それで、その穴から続々と人間界に進出ってわけか。頭の痛い話ね。ロザリオ様が強引に人間と契約を結ばせようとした気持ちが何となく分かるかも。いきなり王になったと思ったら国が大荒れなんて、まいっちゃうよね」

『でしたら、さっさと仲間見つけちゃいましょう。こうしている間に国が潰れるといけませんからね！待っててください、ロザリオ様！』

「・・・（この子、絶対ロザリオ様命だ）。」

にゃーにゃっにゃっ、にゃー

？『くそー！おいっやめろ！やめろってー！！！うあっ』

「『！？』」

私達の目の前で猫が何かを転がしている。
よく見ると手足の生えた生き物のように見える。
「ウメちゃん、あれドワフっぽいね」
『はい、行ってみましょう』
近づくと猫はニャーと鳴いてどこかへ行ってしまった。
？『ふー助かったぜ人間。って、ああ！ウメじゃねえか！』
『パグ！』
「何？ウメちゃんの知り合いなの？」
『おうよ。俺はパグって名前だ。おいウメ、もしかしてお前もロザリオ様から命を受けたのか？』
『ええ、彼女は私の保護者よ』
「あたしの名前は六車七未。よろしくね、パグくん」
『ほほーう、ウメが一番最初に契約を結んだんだな。ってことは、あんたが俺の保護者か』
「不本意だけど」
『六車七未と言ったか？お前名前に車が入ってんだな！うらやましいぜ』

「？」

『パグってね、人間界にある車がオタク並みに好きなんです』

「オタク並みって・・・ウメちゃん、人間界の用語詳しいのね・・」

『俺はやっぱりトコタのクラプンだなー！モジェスタなんか最高だぜ！！』

「ええ！？？日本車！？しかもクラプンって渋いっ！」

『イチニッサンもゴホンダもいいよなっ！』

「・・・」

『七未様、こうなったパグは止められません。全力尽くしてシカトです』

「了解・・・！」

こうして、ようやく一人目の仲間を見つけたが、一体あと何人いるのやら。

波瀾万丈劇は始まったばかりだ。

おへやをあげてね。

車好きのドワフ、パグを見つけた頃、既に辺りは暗くなっていた。
もう、ママが帰ってきてるかもしれないから、早く帰らなくちゃ。

「ウメちゃん、パグ、今日はもう帰ろう。あたし、ママに留守番頼まれてたの忘れてた！怒られるかも・・」

『それは大変ですね。じゃあ、もう帰りましょう。パグ、帰るわよ』

『おうよ！』

「それじゃ二人共この中に入って。他の人に見られたらまずいからね」

あたしは持ってきていたトートバッグの中に二人を入れ、帰路についた。
ママはもう帰ってきていて、怒られるんじゃないか若干不安だった。
まあ、案の定怒られる結果になったのだけど。

夕食が終わり今あたしは世にも奇妙な小人（ドワフ）二人と一緒に自分の部屋にいる。
ママには内緒だ。

『七未！俺との契約の儀式がまだだったな』

「あ、そうだね。んじゃ、はい」

あたしはパグに小指を差し出す。

『おう！”あんた、今日から私の保護者になってね”』

「了解！」

『ありがとよ、今日からよろしく頼むぜ！七未』

こうして私は本日二人目のドワフと保護者になる契約を結んだ。

「こちらこそ。あ、そうだ。二人にもお部屋をあげなきゃね？小物入れならいくつかあるけど、どれが良い？」

あたしはアクセサリーや写真を入れていた小物を二人の前に並べた。

『お部屋をくれるんですか？ありがとうございます！うれしいです！』

『良い奴だな七未は！うーん、どれにしようか・・・』

『迷っちゃいますね、どれも可愛い』

『あっ！俺あれが良いぜ！！』

パグが指さした先にあったの物は・・・

「え？ガラポンの入れ物？これが良いの？」

『私もそれが良いです！！』

「なら、これで決まりね」

このガラポンは、昔あたしが集めていた物だった。
中身には興味はなかったが、当時のあたしはこの透明で色の付いたケースがとても輝いて見えていたのだ。
あたしの持っているガラポンは少し大きめで、二人の体が入っても十分ゆとりがある大きさだった。

「ウメちゃんはピンクで、パグは緑でどう？」

『ピンク私大好きです！』

『緑は俺に似合ってるな』

こうして、二人の部屋が決まった。
中には裁縫用の綿を詰め込んでベッドにした。

「それじゃ、今日はもう寝よう。あたし、明日も学校あるから」

『お前、学校通ってるのか？』

「うん、こう見えても高校1年生だよ」

『え、あたしまだ小学生くらいかと・・』

『俺も』

「なんですってー！二人ともっ！待ちなさーい！！」

『『わー♪』』

あたしは、笑いながら逃げ回る二人を追いかけた。

今日は当分寝れそうもないや。

きょうもがんばってね。

じりりりりり・・・・
目覚まし時計がなってる。起きなくちゃ・・ん？

『じりりりり』

「うそっ！？」

目覚まし時計かと思ったその音は、パグのイビキだった。

「勘弁してー」

ジリリリリリリ

「うわっ！」

今度は本物の目覚まし時計が鳴って、二人が目を覚ました。

『ふあーあ・・よく寝たぜ。ああん？どうした七未』

「いや、なんでもない」

『おはようございます。七未様』

「ウメちゃんおはよう。あなたは良い子に寝てたよ」

『？』

「さてと。あたしはこれから学校だけど、ウメちゃんとパグどうしよう？連れて行くわけにも、留守番させておくわけにもいかないよね」

『俺学校行きてえ！連れってってくれよー大人しくしてるからよお！』

『それなら、私も。パグの暴走を止める役目として、良いですよね？七未様』

「うーん、まあ、あたしの目の届くところに居てもらった方が安心だけど、絶対勝手にどこかに行かないって約束できる？」

『はい！』

『おう！』

「わかった。それじゃ行こっか！」

『『わーい！♪』』

あたしは学校に小人を連れて行くなんて、ちょっとドキドキした。けど、二人共勝手に外に出たりしないで、一日中静かに約束を守ってくれてたみたい。

そして放課後の誰もいなくなった教室で、あたしはトートバックをのぞき込んで事態に気づいた。

ガバッ！

「い、いないっ！一日中静かだったのはいなかったからなのー！？」

慌てて廊下に飛び出すと、女の子の人だかりが出来ていた。

『きゃー！可愛い！！私にも見せてー』

「何があったの？」

人だかりの中の一人に聞いてみる。

『廊下にすっごくかわいい人形が落ちてたの。しかもすごいリアルなお人形！大きさはこれくらいで・・』

「うそっ！？」

完璧にドワフサイズ。

「ごめん、それあたしのなの！」

女の子達に向かって叫ぶと皆が振り返った。

『これ、六車さんのなんだあ。いいなあ、どこで買ったの？』

「え・・買ったっていうか、ちょっと人から預かってる、みたいな・・・」

『そうなんだ。じゃあこれ返すね、はい』

「ありがとう」

私はそそくさとその場を離れ、教室へと向かった。

「もうー！何やってんのよ二人とも！！」

『『ごめんなさい・・』』

「で、何してたのよ？」

『実はパグがドワフを見つけて、声をかけに行こうって・・』

『けど、俺ら道に迷っちまって、うろうろしてたら人間に拾われたんだ。本当にごめん、七未』

「ったく・・。今度からはあたしにまず言ってね？それで、ドワフはどこで見つけたの？」

『グラウンドの鉄棒の辺り』

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3146y/

ふりふりドワフ☆

2011年11月16日12時48分発行